

# コンバーテックジャパン2011

「Convertech JAPAN2011(コンバーテックジャパン)」「新機能性材料展」などが2月16日から3日間、江東区有明の東京ビッグサイトで開催された。主催は(株)加工技術研究会。同展示会では毎回、機能性フィルムをはじめとした素材や、コーディングなどの加工技術に関する製品が展示される。今年は120社が出展し、約4万6000人が訪れた。

村田金箔グループ(東京都文京区大塚、☎03-39476111)は、3次元で直接加熱させ、素材の柔軟性と追従性を生かして曲面への箔押しを可能とした「AGSパッドユニット」と、パッド印刷機「BEA」を出品した。



クラス100並のクリーンルームを作り出す装置を実演(興研)

## 加工技術の「今」を集約 新技術・新製品も続々と



トシコは非粘着性表面加工を展示

「この電源で稼動する同ユニットの簡易性と利便性を強調した。」

また、オンデマンドのメタリック印刷を実現したプリンタを出品。同プリンタには箔のほかホログラムも印刷可能としており、ホログラムの加工を施したカードサンプルには多くの手が伸びていた。

興研(東京都千代田区四番町、☎03-52761931)はオープンクレンジングシステム「KOCAC(Hコーチ)」を実演した。同製品は周りを壁などで囲った箱の中に、印刷機を収納し、作業中の粉塵や埃を吸引して排出する仕組みで、作業環境を清潔に保つことが可能。また、作業中の粉塵や埃を吸引して排出する仕組みで、作業環境を清潔に保つことが可能。

「以前『パベルの最後』を知ったためリサイクル工場に足を運んだ際、ラベルが多くの人の手ではがされてしまっていたのだ。」

「以前『パベルの最後』を知ったためリサイクル工場に足を運んだ際、ラベルが多くの人の手ではがされてしまっていたのだ。」

したまま非粘着となるうえ、伝導性があるため静電気が発生しない。

すでに粘着テープや紙おむつなどの製造ラインで実績があり、今回も引き合いが多かったという。

谷区恵比寿西、☎03-54897189)は、ブリスでは新製品が多数披露された。厚さ0.18mmという従来のランチキユラーから大

幅な軽量化とスリム化を実現した「ランチキユラー200LPI」は、「タマムシ」の目が細かく加工され、ランチキユラーが苦手な文字も読める。また、虹色の光彩を放つ「タマムシ」の目が細かく加工され、ランチキユラーが苦手な文字も読める。

「タマムシ」の目が細かく加工され、ランチキユラーが苦手な文字も読める。また、虹色の光彩を放つ「タマムシ」の目が細かく加工され、ランチキユラーが苦手な文字も読める。

「タマムシ」の目が細かく加工され、ランチキユラーが苦手な文字も読める。また、虹色の光彩を放つ「タマムシ」の目が細かく加工され、ランチキユラーが苦手な文字も読める。

「タマムシ」の目が細かく加工され、ランチキユラーが苦手な文字も読める。また、虹色の光彩を放つ「タマムシ」の目が細かく加工され、ランチキユラーが苦手な文字も読める。

## 相互理解の深化図る

「以前『パベルの最後』を知ったためリサイクル工場に足を運んだ際、ラベルが多くの人の手ではがされてしまっていたのだ。」



3社が会社紹介実施

「以前『パベルの最後』を知ったためリサイクル工場に足を運んだ際、ラベルが多くの人の手ではがされてしまっていたのだ。」

「以前『パベルの最後』を知ったためリサイクル工場に足を運んだ際、ラベルが多くの人の手ではがされてしまっていたのだ。」

## 「デジタル印刷機用データはこう作る」前編

「Surepress L140033A特別内覧会(エプソン販売主催・1月27日、28日)ヘルサル西新宿で開催)セミナーのレポート第3回は、MSP(株)の小宮山寛司常務取締役と、(株)フナミズ刃型製版の木原一裕社長による講演内容を紹介します。MSPは2009年にHPIインディゴ4550を導入し、デジタル機によるラベル製造を展開。フナミズ刃型製版はエキスパートのフナミズ刃型製版に依頼し、生産性の効率化と品質向上を図っている。今回は、両者のこれまでのユニークな取り組みを紹介。同講演に続いて紹介される色に関するトラブル結果については、次号に掲載する。



小宮山寛司常務取締役 MSP(株)

### MSPが考えるデジタル印刷

不況といわれて10年以上経つが、印刷業界においてデジタルは追い風だと思っている。当社は、デジタル印刷に関して、フナミズ刃型製版とタッグを組み、日々格闘している。

まず、有版印刷の現状について見ると、一般的なシル・ラベルは、どこでもほぼ同じように印刷できるため、価格の下落が激しい状況となっている。また、ラベル印刷業の多くは、下請け体質からの脱却が困難で、直接顧客と話をすることも難しいのが現状だ。

最近では、生産コストに占める費用負担の割合が増加している。座席に座っているだけで、

## 見えてきた課題と展望

と例える事が、あるが、実際には、当社はそうではない。むしろ、デジタル印刷の導入は、最悪な方法であり、同時に刃型製版もできるため、データ上の刃型線の位置ずれも起きない利点がある。

導入当初は、デジタル印刷の導入が重荷に感じている部分もあった。今一度、デジタルで本当にやりたかったことを考えてみると、デジタルを入れることで、代理店など中間業者からではなく、直接、顧客から話を聞けるのでは、という希望の観測があったことが鮮明になった。

印刷後に糊が剥がれないなどのクレームや、本当はもっと光沢感を出したかった、というユーザーの声を、中間業者から聞くたびに、先にそれを聞いていれば

### フナミズ刃型製版の取り組み

当社は、刃型メーカーとして80年に創業し、顧客のニーズを踏まえ、徐々にサービスの種類を増やしてきた。98年の製版業務開始当時は、紙の版下で作業していたが、翌年にマッキン トッシュを導入し、イラストレータで版下製作を開始した。97年には、イメージセッターを設備し、フィルム出力の内製化を実現。06年には垂鉛版の腐食を内製化し、CTPも導入した。

現在、有版印刷は、アナログ印刷と呼ばれる時代に

## デジタル用製版も展開



木原一裕社長 (株)フナミズ刃型製版

が必要になる。印刷諸条件に合わせた網やハイライト部分の調整なども重要だ。具体的には、受け取ったデータそのままでは印刷できず、データが切れてしまう場合があるが、それを目立たなくするために、薄く引いたり、グラデーションを短くするなどの作業が必要になる。

「以前『パベルの最後』を知ったためリサイクル工場に足を運んだ際、ラベルが多くの人の手ではがされてしまっていたのだ。」

エプソン「Surepress」内覧会

デジタル印刷機活用セミナーレジュメ③